

一九六一年度

文学旅行の記

小田切 慶一

朝靄の濃い静岡の朝もようやく明け、忙しいラッシュ時を迎える頃、バスは登呂遺跡へ出発した。二千年もの昔を伝える堅穴式住居の周囲は、まだ露を含む草々にとりまかれて清々しいものであった。

登呂を振り出しに、三保の松原、日本平、龍華寺と巡つたが、この日は全く富士が姿を見せず富士山あつてのこれらの名勝も何の変哲もない風景と化していた。昨夜の不眠も手伝つてか、三保の松原は羽衣伝説の潤いを全く感じさせず、照りつける太陽と渴ききつた砂とで、いらだたしい気分になるばかりであった。ただ龍華寺にある大蘇鉄とサボテンは、東海地方の明るさを思わせるに十分であつた。

正午迄に清水次郎長一家への挨拶を終て、午後は沼津からバスも変わり気も新たに、湯ヶ島へとコースをとつた。

修善寺の梅林には花守でもあろうか、一軒家にお婆さんが一人住んで居た。水を所望し

たところ、上つてお茶でも飲んでゆつくりしていけと勧められたが、バスが待つていることでもあるし、Y君が丁寧に断つてそこを去つた。修善寺の町は漱石とゆかりの深い土地とかで、彼が胃潰瘍の療養生活を送つた菊屋旅館、或はその大患を詠じた詩碑等が残されている。バスはその菊屋旅館の軒先をかすめるように狭い町を通り抜けたが、その旅館は漱石には何故か似つかわしくないもののように思えた。

やがてバスは湯ヶ島温泉へ入つた。この湯ヶ島は、井上靖（あすなる物語）若山牧水（山桜の歌）等々数々の詩歌人、作家と関係のある土地で、今夜の宿所湯本館は川端康成が逗留したところである。

湯本館の裏を流れる川瀬の音は、夕には快い眠りを誘い、朝には爽やかな目覚めを呼び二日目を迎えた。

川端康成が伊豆の踊り子と共に歩いて越えた天城峠をバスに揺られていた間に、正午前には下田の市内に入つていた。途中見た寝姿山もお吉の町にふさわしく、吉田松陰が身を潜ませたという弁天島の存在も、幕末の波乱を呼んだ下田の印象を強くするものであつ

た。バスの右手には伊豆大島が意外に近かつた。

伊東、久里浜を経て再びバスに乗り、城ヶ島へ向つた。雲の切れ間に旅行中初めて富士が姿をあらわしていた。

燈台のある丘から見廻す薄暮の城ヶ島は、砂混りの風が吹き荒び、殺伐として「雨はふる……」の白秋の詩とは、およそ程遠いものに感じた。

「歡迎立命館大学日本文学研究室」の大きな立看板に苦笑しながら、漁港の町の腥い潮風の中に三崎での一夜を明かせばもう旅行も最後の日程。旅館から十分ばかりの所に白秋が半年足らずの間伝寓していたという見桃寺があり、自筆々跡の歌碑には、

さびしさに秋成のふみよみさして庭に出
でたり白菊の花
と刻まれている。

魚市場の喧噪を外目にバスを待つこと一時間ばかり……。やがてカンニングペーパー片手のバスガイド嬢の案内で葉山、逗子、鎌倉と海岸線のハイウェイをひた走つた。

晴れ渡つた青空と濃い松の緑を背景に鎮座する高徳院の青銅の大仏は、まこと美男にお

はずみほとけであつた。晶子の歌碑はこの大仏の背後の林の中にあり、トイ、への矢印がころまで、ずつと従つてゐるのがなんとなく可笑しかつた。

最後に訪れた建長寺は、漱石の「門」に描かれてゐるところで、境内はなにか人に忘れられたような感じを持たせるものがあつた。一同はここで記念撮影。解散地大船着が十二時三十分丁度。和気合々の中にこの夏の旅行も無事幕を降した。

○会員消息

- 中尾 博 兵庫県豊岡市西本町二八へ転居
- 道上 隆三 寝屋川市字大利一八ノ一 大和文化ハウス十六号へ転居
- 田辺 匡 大阪市東淀川区小松中通二丁目三七へ転居
- 園山寿味子 八月二十九日岡佳英氏と結婚、新居は島根県簸川郡斐川村大字富村
- 中河 登 興国商業高校へ就職、大阪市西成区天下茶屋二丁目二 池田一正方へ転居

立命館大学日本文学会清規抄

- 一、本会は立命館大学日本文学会という。
- 一、本会は日本文学の研究を推進すると共に会員相互の親睦を図る事を目的とする。

- 一、本会は機関誌「論究日本文学」を刊行し、研究会講演会を開催する他、事業を行う。

- 一、本会の会員は普通会員、準会員、賛助会員とする。

- 一、普通会員は立命館大学日本文学専攻の教員、卒業生、在学生とする。
- 一、本会に役員として、会長一名、評議員若干名を置く。

- 一、会員は総会を形成し、会則の変更その他の大綱は総会に於てこれを決する。
- 一、本会の経費は会費その他の収入による。

昭和三十六年十二月五日印刷
昭和三十六年十二月十日発行

非売品

編集兼 立命館大学日本文学会
発行者 森 本 修

印刷所 京都市下京区七条
御所ノ内中町五〇

中 村 勝 治

発行所 京都市上京区河原町通
広小路西入ル

立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。

入会金 五拾円

会費 一年四百円(四回分納も可)

京都市西陣局区内

河原町通広小路西入ル

立命館大学文学部内

立命館大学日本文学会

振替 京都三八八三番